

## シンポジウム報告

「『子宮頸がんワクチン』問題を考える ―海外からの報告を踏まえて―」

2016年3月

### 1 230名の参加

2015年11月23日、薬害オンブズパーソン会議、全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会、国民の医薬シンポジウム実行委員会の共催によるシンポジウム「『子宮頸がんワクチン』問題を考える ―海外からの報告を踏まえて―」が、東京大学の鉄門記念講堂で開催され、HPVワクチンの被害者、市民、医師、薬剤師、弁護士など合計230名が参加しました。

### 2 第1部 基調講演

シンポジウム第1部では、多くのHPVワクチンの被害者の診療に当たっているデンマークの Louise Brinth 医師 (Frederiksberg 病院)、西岡久寿樹教授 (東京医科大学医学総合研究所所長)、横田俊平名誉教授 (横浜市立大学) が講演をされました。

(1) ルイーセ医師は、デンマークの状況について、2009年から、12歳女子へのガーダシルの接種プログラムが開始され、2014年8月に3回接種から2回接種へのプログラム変更が行われたこと、2009年から2015年までの接種数合計は1,651,152、副反応報告数は1,586、うち重篤な副反応が543であること、現在は、5地域にHPVセンターが設立されていることや、同医師らはこのうちの最も大きなセンターに勤務し、2011年から2015年11月までに300人を診断していることを紹介しました。

そして、公表した3つの論文を順次紹介し、HPVワクチンの副反応が疑われるPOTS (体位性起立性頻脈症候群) に注目した経緯、患者の症状は、多い順に起立性調節障害、嘔気、頭痛、疲労、動悸、認知障害、皮膚病変、体節性ジストニア、神経障害性疼痛、睡眠障害、筋力低下と多彩であったこと、POTS診断ありでもなしでも各種症状の発症割合はほぼ同じであったこと、HPVワクチンの副反応を疑った症例のほとんどが筋痛性脳脊髄炎の診断基準を満たしていたことなどを示し、診断の決め手となる生物学的指標の必要性や、日本とデンマークで、共通の観察項目で研究することの必要性を指摘しました。

なお、2015年11月に、EMAが、HPVワクチンがCRPSとPOTSの原因であることを示すエビデンスはないとする調査結果を公表しましたが、デンマークの保健当局はこの結果を追認したこと、政府は副作用調査のために向こう3年間に7,000,000 クローネ (1億2,360万円) の予算を計上したことなども紹介されました。

(2) 西岡医師は、HPVワクチンの副反応について、自律神経系・内分泌系の障害、認

知機能・情動の障害、感覚系の障害、運動器の障害等が重層的、時系列的に発現し、増悪を繰り返す「HPVワクチン接種と関連した亜急性に重層化する臨床スペクトルを呈する新たな病態」と定義し、これを「HANS」という一つの症候群としてとらえることの必要性を指摘しました。そして、HPVワクチンの副反応を既存疾患の発症としてとらえる「疫学研究」は意味をなさないとして、HPVワクチンがPOTS、CRPSの原因であると支持するエビデンスはないとするEMAのレポートの問題性を指摘するとともに、既存の疾患概念でとらえることのできない副作用に対する対応については、薬害の原点ともいえるべきスモン事件の教訓に学ぶべきであると指摘しました。

(3) 横田医師は、難病治療研究振興財団による88名の副反応被害者の解析結果に基づき、病態の特徴を紹介したうえで、HPVワクチンの副反応を既存のひとつの疾患で切り取る問題性と新規疾患(HANS)と捉えることの必要性を改めて指摘するとともに、短期間に多数の症状が重複して出現する特徴があることを踏まえた症候学的検討に基づき、主たる責任病巣として、視床下部が推定されることなどを紹介しました。

また、HANSとHPVワクチンの因果関係については、症例がHPVワクチン接種後から出現していること、若年女性だけで男性にはいないこと、何よりも一群の症状は重層化し、一つの症候群を形成し、それが多くの症例に当てはまること等から、臨床的に明白であると指摘しました。そして、HPVワクチンの有効性についても、免疫学的に疑問があるとし、「HPVワクチンの接種を中止したら、10年後に日本は子宮頸がん多発国になるだろう」する言説は誤りであると述べました。

### 3 第2部 被害実態報告

第2部では日本と海外の被害実態報告が行われました。

(1) 日本からは、全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会の池田としえ氏が、日本の被害者の深刻な副反応症状を記録したビデオを紹介したうえで、治療はもとより日常生活全般や進学など将来の進路にも及ぶ被害の深刻さや、政府の説明の不十分さ等を指摘しました。2015年11月末現在、13支部を設立し、登録者数は465人、相談件数は2100件に達している連絡会の活発な活動も紹介されました。

(2) 海外からのビデオレターでは、まず、デンマークから、被害者本人のサラさんとそのお母様であるシャルロッテさんが、記憶障害を含む多様な副反応症状が出て、よい治療を求めてスイスまで行ったことや、歩行障害はある程度改善したものの、終わることのない悪夢が続いていると訴えました。

次にイギリスからは、被害者団体のまとめ役のフリーダ・ビレルさんの挨拶の後、アマンダ・デューさんを含め5の方が自己や家族の被害を語りました。その中には、ワクチン接種後一日23時間も眠るようになってしまった方を含め、HPVワクチン接種後にすっかり変わってしまった被害者と家族の生活が切々と綴られています。

#### 4 第3部 パネルディスカッション

(1) 第3部では、1部で講演した3名の医師の他、当会議のメンバーで神経内科医の別府宏圀医師、産婦人科医の打出喜義医師、全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会の代表の松藤美香氏、HPVワクチンの被害者本人の酒井七海氏がシンポジストに加わり、当会議メンバーの隈本邦彦、事務局長の水口真寿美の司会のもとに進行しました。

冒頭、車椅子で登壇した被害者本人の酒井七海さんは、自己の症状や被害に遭って進路を変更せざるを得なくなった経過を話し、2部のビデオレターを見て、改めて被害者の症状や被害実態が日本も海外も同じであると述べました。

(2) 続いて、議論の前提知識を補う目的で、HPVワクチンの必要性和有効性について短いプレゼンテーションが行われました。

① 打出氏は、HPVウイルスに感染しても、それが子宮頸がんに進展するのはそのごく一部にすぎないこと、サーバリックスもガーダシルも、HPVワクチンが、子宮頸がんではなく、CIN2、CIN3（前がん状態である異形成）の減少をもって有効性があるとされているが、これらは有効性の評価の指標としては、信頼性が低いものとされており、このことは厚生労働省の研究班が作成した診療ガイドラインにも記載されていること、子宮頸がん死の有効な予防手段は早期発見早期治療であること等を指摘しました。

② 別府氏は、推進派の人々は、HPVワクチンを打つことで人々が前がん状態（CIN2/3）になるのを98～100パーセント防いでいると主張しており、まるでこのワクチンにより子宮頸がんがほぼ完全に予防できるかのように聞こえるが、実際は、絶対リスクをわずかに0.7%減らせるだけのことであり、別の表現をとれば、NNTは143程度の数になる（前がん状態になるのを1人減らすために約143人にワクチンを打たなければならない）ということであると指摘しました。

③ 隈本氏は、補足として、HPVワクチンの副反応のように発生頻度が低い場合において、副反応の特徴である多様な副反応を、症状毎に分断してそれぞれ接種者と非接種者を比較すると、実際には差があっても、差がないという疫学的なデータが出てしまうしくみについて説明しました。

(3) これを受けて、松藤氏からは、ワクチンの接種に当たり、危険性はもとより、必要性和有効性について、ほとんど説明がなかった実情についての指摘がありました。

そして、シンポジスト間で意見交換をした後、会場とのディスカッションとなりました。

会場からの質問の中には、WHOによる推奨に関する質問もあり、水口からは、ワクチン債を売るビルゲイツの財団とGSKからの多額の寄付の受け入れなど、WHOは、ワクチンについて深刻な利益相反関係をもつことを指摘しました。

(注目情報参照 <http://www.yakugai.gr.jp/attention/attention.php?id=421> )

## 5 おわりに

午後1時30分から5時40分まで4時間以上に及んだシンポジウムは、HPVワクチンをめぐる問題を、多角的に検討する充実したものとなりました。

HPVワクチンの被害については、未だにこの被害が日本だけで起きていると考えている人もいますが、そうではなく、副反応症状や被害実態の深刻さは、日本も海外も基本的に同じであることが改めて確認できました。

また、ワクチンのリスクに関して、実地臨床を踏まえた研究の到達点を共有するとともに、必要性や有効性の検討を通じて、本ワクチンのリスクとベネフィットのバランスが崩れていることが、改めて示されました。

主催者団体や講演者の紹介、各プレゼンテーションのパワーポイント、ビデオレターの翻訳などは、資料編にアップしておりますので、それらをご参照ください。

但し、これらの資料は、あくまでシンポジウムにおいて、**口頭で説明し**補足することを前提に作成されたものであることにご注意ください。また、無断転載や引用等はお断り致します。

おわりに、第1部の講演をお引き受けくださったルイーセ先生、西岡先生、横田先生、本シンポジウムのためにビデオレターを用意してくださった海外の被害者の皆さん、そして、このシンポジウムを支えてくださったスタッフ、ご来場いただきました方々に心からお礼を申し上げます。

以上